

空



2018・4・5

SORA 78号

千葉 原 友 子

ほのぼのと雌松の幹やお正月
打出しやシヨールに包む身の火照り
屠蘇注ぎて夫がぼつりと礼を述べ
衣擦れのかそけき音や切山椒
狛犬の大きな鼻孔梅ひらく

東京 今 井 康 子

天動説信じるもよし初日の出
ランナーにちと道ゆづる冬峠
試験管透かして揺らす花の昼
薄氷と朝の水面の光り合ふ
わらび餅京の絵地図につつまれて

大野城 森 田 明 成

池の面を空けゆく水草冬ざるる
日向ぼこ片意地張らぬ歳となり
人住まぬ集落のこり山眠る
しばらくは車窓に坐る雪の富士
対岸の槌音たかし日脚伸ぶ

福岡 田 代 貞 香

元旦やいつもの川の波頭
ふくら雀八方に翔つ雨戸繰る
大太鼓打つや震へる雪の嶺
冬日和病みてよりよくもの見えて
寒月や風に乗り来る遠汽笛

北九州 横田敬子

句座終へて釣瓶落しの家路かな
コスモスの中より返事下校の子
古井戸の残る更地や花八ツ手
冬銀河祖父母看取りし母看取る
初恋の人は息災若菜摘む

熊本 松田明子

稜線に在す寝釈迦や寒日和
一晚を櫓火に任せ御師の宿
ぼろ市の端に神棚重ねあり
羽子のなき羽子板市となりにけり
鶯替に渡る丹塗りの太鼓橋

粕原吉田 葎

声合はせどんだの竹を高く組む
荒灘にちぎれ入りたるどんだの火
写経せり屏風の虎に背を押され
塔の朱のすつかり失せし冬桜
蝶番ぜんぶはづしてひなたぼこ

福岡 三井所美智子

発車して釣瓶落しの車窓かな
夜神楽や懐の子を神奪ふ
城内に軍馬の碑あり落葉踏む
腕上げし夫の手打ちの晦日蕎麦
ふるさとのうから老いけり寒卵

福岡 永淵 恵子

めまひして術なし丸く冬籠る
臥す部屋に冬日のまはり来たりけり
十二月づかづかと来るカレンダー
乾杯が好きな子メリークリスマス
七秒で忘るる姉に餅を焼く

直方 曾根 富久 恵

煤払ひ仏具磨くは子の仕事
赤ん坊に泣かれてしまふ初座敷
一人づつ帰つてゆきし四日かな
ねんごろに尾を振る鳥や風花す
師系てふ言葉は玉よ日脚伸ぶ

北海道 押田 裕見子

朝夕の落葉搔きをり無職なり
世に疎くみて流されぬ浮寝鳥
嫁の手も借りてかしまし年用意
衿元の真珠のブローチ年新た
七十の長より回す年始酒

兵庫 えとう 樹里

冬空の落ちくるジェットコースター
糶のあと女形河豚のみ残りけり
枯れきつて银杏無骨な木となりぬ
初富士を伊勢の海より拝すかな
星読みの佳き占ひや初日記

直方 吉田悦子

京都 天谷翔子

とんとんと妹寝かす子冬うらら

数知れぬ頬濡らし来し聖歌かな

冬すみれ夫の完治を告げられし

冬北斗古地囀にはなき町に住み

初時雨インクの青に染まる指

霜の夜の透きとほりくる言葉かな

九年母や男はいつも遠く見て

ポインセチア出窓に飾り回復期

引つ込みのつかぬ諍ひ冬の雲

冬苺母が甘えてくれにけり

長崎 松尾龍之介

粕屋 秋 千 晴

ひひらぎの落花は白き直線に

山茶花や日向の椅子に母を置く

髭面がひとり第九のティンパニー

貼り替へし障子に庭の影揺るる

底なしの疑心暗鬼の夜凧

箒目の流れゆるやか切山椒

八百万の人にもまれて初詣

弱りたる母へ七種みぢん切り

寒厨に落ちて鍋蓋逃げまはる

子雀を数ふるうちに飛びたてり

兵庫 林 徹 也

石仏の隠れ十字や石路の花

薄墨の文読み返す花八手

点滴の終の雫や冬日差

群れはづれ沖へ沖へと番鴨

冬木の芽入院の荷を整ふる

神奈川 窪 み ち 子

耳底に荒き海鳴り鱒大根

冬落暉櫛林の燃えゆくよ

熊よけの鈴鳴らし来る菓売り

智恵の輪のほどけぬままに日向ぼこ

初夢や逢ひたきひとは後ろ向き

須恵 苑 実 耶

飯粒を撒きて誘へり春の鳥

巻き舌の異国のことば水温む

春の風自転車に従く三輪車

入学児祖母に校歌を教はりて

酒壺の封印を解く花筵

大阪 井 上 和 子

金明水銀明水や初明り

小賀玉の一枝銜へて寒鴉

静まりし砂さざ波や冬日和

光背に千の仏や堂冴ゆる

竜の絵の映る井水や冬の雷

空集抄——柴田佐知子抽出

冬ざれや鏡の欠らまだ鏡

角野良生

日向ぼこ誰かを待つてゐるやうな

高倉和子

雪来るか夜の柱のまた軋む

深川淑枝

鍵かけて引いてみる癖花八つ手

岸洋子

明日在りや在りとして漬くる花菜かな

中田みなみ

煮凝の底深海につづきけり

曾根富久恵

万の鶴眠れる闇に微熱あり

永淵恵子

みづうみは空と向き合ひ去年今年

戸栗末廣

みづからの重みに沈む寒の鯉

山本則男

日向ぼこ手のひらに乗る神の鳥

吉田 葎

寒紅を拭ひて妻に戻りけり

吉田悦子



焚火の炎時に刃となりて飛ぶ

眼に胸に槽火納めて故郷去る

白炭の触れて鋼の音放つ

地震跡に今年限りの楮蒸す

するすると星降りて来し聖夜劇

嘘少し混じつてゐたる日記果つ

声つぶし合ひて闇夜の春の猫

寒晴や海峡ゆらし巨船ゆく

蹲踞の中の青空実千両

家々の灯の色に軒氷柱

七種の粥も冷めたる目覚めかな

初雪に跡付けすぐに戻る猫

人恋へば降つて来さうな枯木星

石橋 幾代

矢野 百合子

原 友子

松田 明子

天谷 翔子

井上 和子

千波 悠

田中とし江

石川 子熊

押田 裕見子

田岡 千章

青木 朋子

大西 乃子

銀杏落葉に座して長者の心地かな

窪 みち子

保存さるる町並白く冬に入る

岩下きぬ代

麻醉より覚めゆく聖樹見えてくる

林 徹也

白波を繰り出してゐる神渡し

岡村尚子

良き母となるべくたたく齋かな

仲里奈央

風呂吹を箸ゆるやかに分かちけり

宮川正彦

年末に荷物まとめて夜逃げめく

畑 由子

不如帰ひとつやふたつ知らぬふり

古賀真理

日一日余命は減りぬ日向ほこ

山田正子

目の合ひて橙取りし詫び言はる

河原敬子

恋しても失恋しても毛糸編む

横田敬子

障子閉ぢ母籠りたる家の黙

山内 碧

頼まうと言ひたき構へ薬喰

田代民子



ふるさとは闇の固まり寒土用

水注ぐ壺の音澄み日脚伸ぶ

編みかけの帽子は遺品つづき編む

父親とわかる靴音クリスマス

割烹着のゆるき袖口笹子鳴く

父の櫛母の櫛あり昭和の日

山眠る空席多き路線バス

自転車にリヤカー繋ぎ年の市

屋根反らせあふ都路や冬に入る

遮断機の上がりて春の怒濤かな

とろとろとやがて溢るる春の水

初夢の母は此度も振り向かず

鬼の面付けて互ひに鬼は外

田代貞香

兒玉充代

織田高暢

三井所美智子

西住三恵子

小林朱夏

遠山のり子

小島翠波

日高孝

あさなが捷

田中素直

矢野綾子

中尾文子

空作品評

柴田佐知子

鍵かけて引いてみる癖花八つ手 岸 洋子

冬ざれや鏡の欠らまだ鏡

角野 良生

〈貌が棲む芒の中の捨て鏡 中村苑子〉というシユールな句が浮かんだ。人の貌を写し続ける鏡は、使い込むうちに強い思いの果ての妖しい力が備わってきそうに思えてくる句である。掲句はそのような情念を踏まえたうえで、あくまで具象に徹したところが良生さんらしい。

雪来るか夜の柱のまた軋む

深川 淑枝

上五の〈雪来るか〉で、はてと立ち止まる。ここからどういふ展開になるのかと。その展開は〈夜の柱のまた軋む〉としなやか且つ繊細だ。長い年月雪に耐えて人と共に時を経てきた雪国の家の大きな梁や使いこまれた框などが見えてくる。〈雪降るか〉と〈夜の柱のまた軋む〉とがひびきあひ、風土までもひろがってくるのだ。洗練された技量と感性が光る。

確かに鍵は掛けた。しかし念のために引いてみる。必ずこれをしてしないと、安心できず今や癖となつたのだ。このような方は多いのではないだろうか。私は門から引き返してテェックすることもある。しかしこれを句にしようとは考えなかった。下五に据えられた〈花八つ手〉のさりげなさがいい。

明日在りや在りとて漬くる花菜かな 中田みなみ

〈明日ありと思ふ心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものかは〉は、親鸞上人十九歳の時の作と伝えられている。この歌で親鸞が詠んだ人の世の無常観はみなみさんの作品にも底流している。しかし〈在りとて〉と軽やかに言いなし、明日の為に漬けているのは菜の花である。みなみさんが詠むと、はかなきこの世に明るい光が差し込んで来る。

煮凝の底深海につづきけり 曾根富久恵

今号に空新人賞を受賞された富久恵さんの作品三十句を掲載している。ご家族が亡くなられたこともあり、しみじみとした静かな作品が多く見られた。

しかし本来はきつぷの良いからりとしたお人柄同様、大胆かつ瑞々しい作品が多い。この気質は直方句会の他の方々にも感じられる。直方句会の仕事をお持ちの方が多いため夜ひらかれている。私は毎月送られてくる清記用紙に入選・秀逸・特選を記しアドバイスを添えて返送している。その後、空への投句を見て初めて作者を知ることができ楽しい。

直方句会の紹介が長くなつたが、さて掲句。(煮凝)は煮魚など一晩おくと煮汁に溶けたゼラチン質が凝固したもの。料理屋で出される夏野菜と魚介の涼やかなゼリー寄せのようなものではない。季語(煮凝)の背後には冬の寒さがあるのだ。暗い煮凝の底が深海に続いているという感覚は、この季語にきちんと向き合ったからこそ生れてきたものと思ふ。

万の鶴眠れる闇に微熱あり

永淵 恵子

日本で万の鶴となれば、鹿児島県の出水であろう。闇に沈んでも作者はそこには数多の命が潜んでいることをひしひしと感じているのだ。それが(闇に微熱あり)という表現に昇華されたのである。具象的措辞ではないのに臨場感がある優れた句である。

みづうみは空と向き合ひ去年今年 戸栗 末廣

(みづうみは空と向き合ひ)は、考えるとごく当前のことなのだが、このように作品化されると驚く。みづうみと空を見ても、(向き合ひ)という言葉がなかなか浮かばない。大きな景を大きく把握する作者のスケールの大きさがなくてはこの表現を得ることができないのだ。季語の(去年今年)との響き合いも見事だ。そのほか取り上げたかった句をあける。

日向ほこ誰かを待つてゐるやうな	高倉	和子
みづからの重みに沈む寒の鯉	山本	則男
焚火の炎時に刃となりて飛ぶ	石橋	幾代
するすると星降りて来し聖夜劇	天谷	翔子
嘘少し混じつてゐたる日記果つ	井上	和子
声つぶし合ひて闇夜の春の猫	千波	悠
風呂吹を箸ゆるやかに分かちけり	宮川	正彦
年末に荷物まとめて夜逃げめく	畑	由子
不如帰ひとつやふたつ知らぬふり	古賀	真理
頼まうと言ひたき構へ葉喰	田代	民子
ふるさとは闇の固まり寒土用	田代	貞香
編みかけの帽子は遺品つづき編む	織田	高暢

空集

柴田佐知子選

日向ぼこ誰かを待つてゐるやうな

福岡

高倉

和子

初東風や石段多き港町

水槽の中の居心地寒波くる

土壁のひびの伸びゆく実南天

一切を封じ寒鯉動かざる

また同じところで笑ふ蜜柑かな

海峡の沖なきうねり大根干す

北九州

深川

淑枝

風花や流人小屋めく塩焚き場

凧や海図に青き等深線

あやかしの付きし流木冬の雷

福藁を焚くや海風暮れて来し

雪来るか夜の柱のまた軋む

音たてずひとりつきりの年用意

福岡

岸

洋子

ちやんちやんこまだ年寄りに慣れてゐず

冬ざれや鏡の欠らまだ鏡

言ひ出せぬこゑ白息となるばかり

エンディング・ノート二人で書く良夜

福岡

角野

良生

だぼ鯨といふ釣れやうでありにけり

原発に神棚のある寒さかな

鮫鱈のはらわたどつと辻り出る